

〈続宇治十帖創作〉の形成基盤

— 散逸物語『心高き春宮宣旨』『左も右も袖ぬらす』『朝倉』『川霧』からの照射 —

大倉 比呂志

一

『源氏物語』の偽書として『山路の露』『雲隠六帖』（一般的に『雲隠』『菓守』『桜人』『法の師』『雲雀子』『八橋』が考えられている）が知られているわけだが、散逸物語の『心高き春宮宣旨』（以下、『心高き』と略す）と『左も右も袖ぬらす』（以下、『左も右も』と略す）は『後百番歌合』において『源氏物語』と各々十首ずつ、『朝倉』は十三首ずつ番えられ（その他に『夜寝覚』『御津浜松』『とりかへばや』『露の宿り』『末葉の露』『海人の刈藻』が番えられている）、『無名草子』においても『心高き』『とりかへばや』『朝倉』『川霧』『岩打つ波』『海人の刈藻』『末葉の露』『露の宿り』『駒迎へ』『緒絶えの沼』『初雪』などが論評されている。

そこで小稿では、『山路の露』や『雲隠六帖』に表象されるように、〈続宇治十帖創作〉の形成基盤をめぐって、『心高き』『左も右も』『朝倉』『川霧』の散逸物語四作品に照射して、それらとの関連について論じていきたいと思う。

二

『後百番歌合』は定家によって編集され、鎌倉初期に成立したと考えられており、⁽¹⁾『無名草子』は最近においては、正治二年（一一〇〇）七・八月以後から建仁元年（一一二〇）十一月以前に成立したと考える説が有力視⁽²⁾されている。その『無名草子』では『源氏物語』『狭衣物語』『夜の寝覚』『みつの浜松』が論評された後に、前述の『左も右も』以外の三作品が論じられているわけだが、『左も右も』は『狭衣物語』（巻三・巻四に各々一例ずつ）に記事がある。『心高き』は「東宮の宣旨など、今の世にとりては古きものはべれ。まことに、言葉遣ひなどは古めかしく」⁽³⁾『無名草子』と記されており、「古きもの」「古めかしく」が何をさしているのか、またその成立年時はいつなのかということが問題となろうが、⁽⁴⁾『川霧』を除く三作品はともに『明月記』貞永二年（一一三三）三月二十日の条に名が記されている。『狭衣物語』（巻一〜四まで各一例ずつ）においても取り上げられ、『源氏物語』以前の成立と考えられる『隠れ蓑』が『無名草子』で論評さ

れているために問題は残るが、『無名草子』では『源氏』以前の物語はまず論評しないたてまえとなっている⁽⁵⁾ことから、やはり『心高き』は『源氏物語』以後の作品として理解するのが妥当だろう。

ところで、三角洋一⁽⁵⁾は散逸物語『おやこの中』が白河院皇女令子内親王(後に鳥羽院准母)である二条太皇太后宮に仕えた大式⁽⁶⁾によって創作されたのではないかと考えているわけだが、さらに、『後百番歌合』八十番右に『源氏物語』葵巻の光源氏歌と番えられた『心高き』の歌は、

尽きせぬこととおぼしめし嘆きけるころ

御製

ともし火の尽くるをきはに眺めつつまどろはぬ夜を幾夜経ぬらむ⁽⁷⁾

とあり、それは『二条太皇太后宮大式集』に「上陽人」の題のもとに所収されている「⁽⁸⁾ともしびのつくるをきはとながめつつあはれいくよをなげききぬらん」(『新編国歌大観』第七巻)という歌と極めて類似しているという点から、『心高き』の歌を大式が「上陽人」の題詠に転用したのではないかと指摘されている。⁽⁵⁾とすれば、『心高き』は十一世紀終わり頃から十二世紀初頭頃に成立したと考える方が蓋然性が高いといえよう。⁽⁸⁾

一方『源氏物語』の成立以降、薫の浮舟に対する愛着と浮舟の拒絶を内容とする『山路の露』が創作された。それは「結局「夢浮橋」の結末を駄目押しするものではないか⁽⁹⁾」いわけだが、最近では十三世紀中頃と考える説もある。さらに『雲隠六帖』の『雲隠』は、亡き紫上への思いを抱きながら、出家した兄朱雀院を頼って出家した光源氏のありようと死を語り、前掲の『巢守』以下の五作品は宇治十帖以降の世界を語っている。すなわち『巢守』は冷泉院の出家、薫が浮舟を還俗させて妻としたこと、匂宮の即位と中君の立后を扱い、『桜人』では匂宮帝の夢枕に紫上が現われ、匂宮

帝が二条院に行幸することが語られている。『法の師』では匂宮帝(匂宮と中君との子である一宮が東宮)と薫(浮舟との間に二人の子供あり)との子供たちのことが触れられ、中君の死と薫と浮舟との出家が扱われている。

『雲雀子』では薫の死後、薫の子である女二宮腹の少将が嵯峨院に出かけた折、故六条院が夢枕に立ったことが語られている。『八橋』では匂宮帝の仏道への傾斜が語られているように、宇治十帖以降のことが時間的な流れに沿って記されている。このように『雲隠』を除いた『雲隠六帖』の五作品は、夢浮橋巻で浮舟の薫に対する拒絶で擱筆されたために、薫と浮舟との恋の行方や匂宮の即位問題などに対する関心がこれら五作品創作の原動力となったのではなからうか。⁽¹¹⁾

三

まず、『風葉集』に十首(『心高き』)、十五首(『左も右も』)採られている両作品の内容を検討することにした。

『心高き』における内大臣(『風葉集』では「右大臣」と記されているが、「内大臣」の呼称で統一しておく⁽¹²⁾)は、

① 右のおほいまうち君、ほかに遣はせりける文を、御冷泉院尋ね取らせ給ひて、忍びてたまはずとて、「いかにして思ひ知らせんと思ひしをこれこそ神のたすけなりける 人をぞともに」とのたまはせて侍りける御返し

心高き宣言

限りとぞ思ひ絶えにしその日よりまた嘆くべきこともなき身を(風葉集・恋四・

一〇三三)

と記されているように、内大臣の宣旨以外の女性への恋文を後冷泉院が手に入れて、それを宣旨に送っている点から、内大臣は好色者として造型されており、『無名草子』にも「内大臣の分くる心多かるに」と語られている。その内大臣の好色性は、

② 権中納言ときこえし時、一品宮に
内大臣

我が流す涙の色に似たるかな物思ふ宿に落つる紅葉葉（後百番歌合・七六番・三五二）

③ 一条前齋院にて、つれなさを恨みきこえて
内大臣

いとどしく萩の上風吹き乱り心まどはす秋の夕暮（同右・八二番・三六四）

④ 女のもとにまかれりけるに、萩吹く風の心あわたしきまで聞こえければ
心高き右のおほいまうち君

いとどしく萩の上風吹き乱り心まどはす秋の夕暮（風葉集・秋上・二二六）

とあるごとく、一品宮や一条前齋院との関係からしても理解できよう。

さらに、

④ 宣旨、ゆくへなくなりける後、夢に、「嘆くまに魂もみななくなりて今はむなしきからと知らずや」といふを御覽じて
御製

恋ひわびてまどふ我がたまことならばむなしきからのゆくへ尋ねよ（後百番歌合・七八番・三五六）

④ 宣旨、行方知られたてまつらずなりて後、「今はむなしきからと知らずや」と聞こゆると御夢に御覽じて
心高きの後冷泉院御製

恋ひわびてまどふ我が魂ことならばむなしきからの行方尋ねよ（風葉集・恋四・一〇三六）

一〇三六）

とあり、小木喬は「宣旨は思いがけぬ危難に落ちて、あるいは浮舟のように死を覚悟してそこから脱走し、生死の境の夢か現かという状態にあることを、春宮（注―後の後冷泉院）に告げたものかと思われる」とし、また、樋口芳麻呂も「多情な右大臣が里に下っている宣旨と契りを結んだために、宣旨は愛する後冷泉院の許に帰ることができず、絶望して行方をくらませたのだろう」と推測しているように、宣旨は内大臣と後冷泉院との板挟みとなつて、④④の詞書の傍線部から浮舟のごとく失跡したものと考えられる。さらに、「東宮の御位の末に娘参らせて、その便りに、ただ夢ばかり、立ちながら行き逢ひて、かたみに堰きかねてたち別れさせたまへるほどこそ、いとあはれに悲しけれ」（『無名草子』）とあるように、「女君（注―宣旨）には内大臣との間に娘が生まれ、それをかつての恋人である天皇のもとに入内させたらしい」のであるが、内大臣と春宮という貴顕に愛された宣旨は浮舟のイマージュが濃厚であると思われる。その宣旨が薫型の春宮ではなく、匂宮型の内大臣と結婚した⁽¹⁶⁾ということは、薫と浮舟との結婚の可能性がありながらも、夢浮橋巻の巻末が浮舟の薫への拒絶で終わっている点を考えると、内大臣と宣旨との結婚は浮舟型女性が結婚したこととその相手が匂宮型の人物であったということは、それはいわば二重の意味における宇治十帖への一種の反措定であり、「春宮の悲恋の物語」⁽¹⁴⁾でもあったともいえるよう。ちなみに前述したごとく、『心高き』より後に成立したと推測される『巢守』や『法の師』は薫と浮舟が結婚し、『法の師』では二人の子を設けたと語られている。とすれば、前述の二作品は匂宮型と浮舟型の人物が結ばれることに反発した再反措定であったとも考えられよう。

四

次に、『心高き』と大きく隔たらずに成立したと考えられる『左も右も』において、

⑤ 中納言の君心ならずかきこもりたる秋

関白

菊の露消ゆばかりにも落ちしかな逢ふこと絶ゆる秋の涙は（後百番歌合・六九番・三三八）

⑥ 中納言の君かきこもりて後、きさいの宮に参りて、常に語らひ給ひし戸

口のたてたるを見給ひて

関白

ありし世の草の原とぞ見るからにやがて露とも消えぬべきかな（同右・七十番・三四〇）

と記されていることからすれば、后宫に仕える女房の中納言の君を関白（もとの宰相中将で、『後百番歌合』・六四番・三二八に注記の形で記されている）が見初めるわけだが、⑤⑥の傍線部のごとく、詞書に中納言の君が「かきこもる」と記されており、さらに、

⑦ 山里に住み侍りけるおほいまうちぎみ尋ねまうで来て、「つれづれに語ら

ふ人も添はぬ身を」と申し侍りければ

袖ぬらすの准后

語らはん里に來鳴かでほととぎすみ山隠れを何か尋ぬる（風葉集・夏・一七四）

とあるように、何らかの事情で、中納言の君は「山里」に身を隠したのではなかるうか。この中納言の君と結ばれる前に、

⑧ 承香殿女御、「いはじとて忌むにはあらず浮き沈み生ひたる葦のねにさはる身を」とのたまひしに

関白左も右も袖ぬらす宰相中将是也

ことわりに浮き沈まるる水の泡のやがて消えぬる我が身ともがな（後百番歌合・六四番・三二八）

とあり、関白と承香殿女御との恋が語られているが、この承香殿女御が入内したために、関白女と結婚し、『後百番歌合』（七一番・三四二）の詞書「もとの上、さま変へ給へるとぶらひに（関白ガ）渡り給へる夜、……」によって、関白女が出家したことが知られ、その後中納言の君と結ばれたと考えられる。⁽¹⁶⁾ その中納言の君は准后（『風葉集』夏・一七四、秋下・二九一、恋五・一一一五、雑一・一一七八）となったと記されていて、准后とは「娘が后宫になり、また国母になることによって、その母が重んぜられる」こと⁽¹⁴⁾とであり、『後百番歌合』（六七番・三三四）に出産のために山里に籠ったと記されている点から、中納言の君の産んだ女兒はやがて入内して皇子を出産し、その皇子が即位したために、国母となったのである。中納言の君にとってはサクセスストーリーであるわけだが、『後百番歌合』の『左も右も』と番われている『源氏物語』の十首のうち、四首が薫の宇治関係の歌（六六番・三三二、六九番・三三七、七十番・三三九、七二番・三三三）。他に宇治十帖関係の歌は、六五番・三二九・浮舟、六七番・三三三・中君がある）である点に注目すれば、『左も右も』は宇治十帖的な色彩が濃厚な作品といえるのではなかるうか。それゆえに、関白が恋慕した承香殿女御の形代として中納言の君を設定しているのではないかと樋口芳麻呂⁽¹⁹⁾は想定し、さらに関白は薫に該当すると考えて、「女主人公の中納言の君は、宇治の八宮の大君の形代としての浮舟に相当し、また承香殿女御は、大君の役割を担

っているのではないかと推測される⁽²⁰⁾と述べているように、宇治十帖の影響を濃厚に受けた作品であって、薫と浮舟に該当する関白と中納言の君とが結ばれた結果、二人の間に将来帝となる皇子を出産することになる女児が生まれるという夢浮橋巻以降の物語が創作されたのが、『左も右も』ではなかったのだろうか。

とすれば、大君↓中君↓浮舟という女性関係が不発に終わった薫に対する『左も右も』の作者の願望がこのような話筋を考案したのではなからうか。それも宰相中将は関白太政大臣という人臣としては最高位を極め、中納言の君も准后という称号を与えられているところから、薫と浮舟との結婚を願望した『左も右も』の作者のなせるわざが、このような結果を将来したのだともいえよう。したがって、『心高き』と『左も右も』の男主人公が、各々匂宮型と薫型という対極に位置してはいるものの、夢浮橋巻以降の展開が創作されたという点で、〈続宇治十帖〉を執筆しようとする作者の熱い視線を看過すべきではなからう。

五

ところで、『無名草子』の『心高き』の「いとあはれに悲しけれ」という最後の論評に続けて『朝倉』『川霧』なども、かやうの筋のものぞかし」とあり、『朝倉』と『川霧』が『心高き』と同じ「筋」であると語られている。ではこの「筋」とは何を意味するのであろうか。『無名草子』では他に二個所ある。それらは、

①もと(注一原作本)には、女中納言のありさまいと憎きに、これ(注一改作本)

は何事もいとよくこそあれ。かかるさま(注一男女の入れ代わり)になる、うたてけしからぬ筋にはおぼえず、……(今とりかへばや)

◎『大和物語』と申すも、ただかやうの(『伊勢物語』ト)同じ筋のことなれば、とどめはべりなむ。

と語られており、前述の三例にすべて、「趣向。構想」という頭注が施され、③に関して「必ずしもストーリーを意味しないことは、この両者の関係からもわかる」と注が施されているわけだが、以下に述べるごとく、これらは「内容」という意味に解釈すべきではなからうか。そこで『源氏物語』で用いられた「筋」二二七例(うち「御筋」五例、「ことの筋」十一例、「ひとつ筋」「ものの筋」各一例を含む)を調査してみると、「血統」「恋愛」「後の位」「譲位」「身分」などの意味の他に、和歌などの文学的なものに関わる例を八例あげることができるが、三例ほど引用してみると、

④このごろ、明け暮れ(桐壺帝ガ)御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。(桐壺巻)

⑤男君(二夕霧)の御宰相の乳母、つらかりし御心も忘れねば、したり顔に、いづれをも蔭とぞ頼む一葉より根ざしかはせる松のすゑすゑ

老人どもも、かやうの筋に聞こえあつめたるを、中納言(二夕霧)はをかしと思す。女君(二雲井雁)はあいなく面赤み、苦しと聞きたまふ。(藤裏葉巻)

◎(浮舟ハ出家後ニ)同じ筋のことを、とかく書きすさびるたまへるに、中将の御文あり。(手習巻)

となる。これらの三例の「筋」は近年の主要な注釈書において、④は「長

恨歌と同じ内容」(新潮古典集成頭注)、⑧は「このような(夕霧夫妻を祝福する)内容の歌」(岩波新大系脚注)、⑨の「同じすぢのこと」は、「なきものに」と「限りぞと」の歌が、表現はちがっていても内容は同じであったように、幾つも似たような内容の歌をかきすすんでいたのである⁽²²⁾。(角川評釈鑑賞)、「前歌と同じ内容のこと」(小学館新編全集頭注)と解釈されており、いずれも「筋」は「内容」の意味に理解されている。以上のことにより、「筋」は「内容」という意味を持っていることが判明したのであって、『無名草子』で『朝倉』と『川霧』の話筋の内容が『心高き』と同様なのだと言われているのはなからうか。

そこで、『朝倉』と『川霧』の二作品に関していささか述べていくことにする。『朝倉』の内容に関して樋口が適確に要約しているので、それを引用すると、

薫大将が浮舟を宇治に隠し据えたように、三位中将―薫的な人物である―に白河に忍び住ませられ、匂宮的な人物とおぼしい、武部卿宮と山里で契りを結び、さらには入水し助けられる朝倉君は、浮舟に似た恋を体験しており、『更級日記』中で浮舟の女君に心を寄せ、夢みている孝標女の記述と符合するのである。

と記されている。そこで入水後における女君の状況を見ておくことにする。入水後助けられた女君は、式部卿宮との間に生まれた姫君を養育していたが、都に迎えられ(後百番歌合・五九番・三二八)、女君は皇太后宮に大納言という女房名で出仕した後、

⑨ 昔の契り違へず巡り会ひて

朝倉の女君

あはれとも憂しともえこそ岩代の野中の松の結ぼほれつつ⁽²³⁾(後百番歌合・六三番・三二六)

のように、三位中将『後百番歌合』・五三番・三〇六によれば、後に関白内大臣と再会して、

⑩ 関白の権中納言生まれ侍りけるに、遣はされける衣の袂に付けられて侍りける 朝倉の皇太后宮

たづの子の巢立ち始むる毛衣は色も変らぬためしなりけり

御返し 皇太后宮大納言

色変へぬためしに裁てる毛衣は待ち取る袖ぞ置き所なき(以上、風葉集・賀・七四三―七四四)

と二人の間には後に権中納言となる男児が誕生する。とすれば、前述した二作品『心高き』『左も右も』においては女主人公の出産した娘が入内するという内容であるから、『朝倉』はこれら二作品とは多少趣を異にするが、樋口の指摘通り、確かに女君には浮舟的要素が濃厚であって、『無名草子』の論評が『心高き』との話筋の内容の類似性を指摘している点は看過すべきではなく、薫型の関白内大臣が最終的には女君(皇太后宮大納言)を獲得するのである。

ところで、『朝倉』は『風葉集』に十九首採られ(詞書だけのものが一つあるので、計二十首採られていたのだろう)、『更級日記』奥書に孝標女作かと記されている。さらに、前述したように『明月記』に『心高き』『左も右も』と同様にその名が記されている点からも、これら三作品の間には成立年時において大きな隔たりはないものと考えられる。

さて『川霧』だが、『風葉集』に七首採られている。入集歌から女主人公を新中納言と考えることは間違ひなかるうが、男は内大臣と大将が登場し、それをどのように把握するかが問題となる。『風葉集』(雑一・一一九七)に、

⑩ 大将身まかりて後、星合ひを見て、長きためしに引き立てしも思ひ出でられければ
川霧の中宮の新中納言

七夕の行き逢ひの空も別れにし人にもかかる契りともがな

とあり、詞書によって、大将の死後、内大臣が通い始めたとみる方が自然であるとするならば、新中納言の男性関係は大将から内大臣へと移行したことになる。だが『無名草子』に記されているように、『川霧』が『心高き』の話筋の内容と同様であるならば、新中納言が宇治十帖のごとく二人の男と同時進行中であつたと考えられ、大将の死後、内大臣と正式に結婚し、

⑪ 娘の袴着に、中宮腰結はせ給ふとて、「雲居まで枝交はずべき」とのたまはせける御返し
川霧の中宮の新中納言

雲居まで生ひ昇るべき若松のこや枝交はず初めなるらん(風葉集・賀・七一九)

とあるように、二人の間に女兒が誕生し、新中納言の仕えている中宮によって祝福されたと解される。大将と内大臣との人物造型のありようを明確にし、残るものは残るものの、以上のように推測しておきたい。

ところで、前述の引用文⑪に関して、小木は、

女は中宮に仕えて、中宮からも愛され、子が生まれるとともに内大臣の正妻

の地位にすわつたのであろうし、またその素姓が賤しくなかつたことも察せられる。中宮が「雲居まで枝かはすべき」と言われたことは、おそらく、中宮に、春宮あるいは将来春宮たるべき皇子があつて、その配偶者として期待するということであろうし、その娘が、若紫のように「いみじくおひさき見えてうつくしげなるかたち」であつたことも想像される。

と推測して、「新中納言が貴公子に深く愛されて「身にあまる幸」を得る話」⁽¹⁴⁾であると考えているように、『心高き』『朝倉』『川霧』の三作品は「女の幸の物語」⁽¹⁴⁾と結論づけている。確かに、『心高き』では女主人公である宣旨と内大臣との間にできた娘が入内し、『朝倉』では女主人公皇太后宮大納言は関白内大臣との間に後に権中納言となる男児を出産しており、『川霧』では女主人公新中納言と内大臣との間に生まれた女兒が中宮に祝福されたとあるように、女主人公にとっては幸福な状況を獲得した物語であつたに違ひない。さらに、『左も右も』の女主人公中納言の君は関白との間に娘を出産し、その娘が入内して皇子を出産して、その皇子が即位すると同時に、中納言の君も准後の位を授けられるという、いわば女としての幸福の頂点が語られた作品ではあるが、それはあくまでも結果にすぎないのであって、女主人公がそのような幸福を獲得するに至つた過程に注目すると、今まで述べてきたごとく、宇治十帖的世界が濃厚にちりばめられているのであつて、『無名草子』の記事からも、この『川霧』を『心高き』『左も右も』『朝倉』と同じ範疇に属する〈続宇治十帖〉の中の作品群の一つに位置付けたいと思う。

例えば狭衣大将や『夜の寢覚』の男主人公内大臣は薫型の人物として造型され、『更級日記』において孝標女の源資通に対する淡い恋が語られているわけだが、その資通は薫型の人物として造型されているという指摘があるように、薫型志向は当時の一般的傾向であったと考えられる。また、『更級日記』では『源氏物語』のことが具体的な登場人物名を伴って四個所にわたって語られているわけだが、その四個所すべてに浮舟の名があげられている点に注目すると、作者孝標女の所属する階級性やへさすらい

人〈浮舟との同質性の問題が当然関わってはくるものの、永承七年（一〇五二）に〈末法〉に入ったとされており、それ以降の不安な時代状況と浮舟の〈浮遊性〉とが合致していた点をも考えていく必要がある。⁽²⁹⁾惜しいことに前述したこれら四作品が散逸してしまっている現状では、明確なことはいえないとしても、『源氏物語』の成立後それほど時間的な隔たりがない頃に、〈統宇治十帖創作志向〉といった状況が現出したという点を想定しておかなければなるまい。その基盤となった四作品の散逸物語の果たした役割は過小評価してはならず、〈統宇治十帖創作〉という問題を考える場合には、これら四作品を従来以上に照射していくべきではな

かろうか。

以上のように、『心高き』『左も右も』『朝倉』『川霧』の四作品は夢浮橋

巻以降の展開を創作したものであり、『川霧』を除く三作品は女主人公が失踪し（『心高き』『朝倉』、もしくは山里に身を隠し⁽³⁰⁾『左も右も』、あるいは入水したのであって（『朝倉』）、浮舟の模倣が顕著であるといえよう。四作品とも成立年時を確定できないが、それらは『雲隠六帖』の『菓守』『桜人』『法の師』『雲雀子』『八橋』の五作品に先行するものと考えておいて間違いないだろう。

ところで『山路の露』は、本位田重美が『建礼門院右京大夫集』との詞書の類似により、成立を文治四、五年（一一八八―一一八九）以前であるとし、また横溝博は『正治初度百首』『後度百首』との和歌の類似から正治二年（一一〇〇）前後と想定していることに従えば、前述の四作品との成立年時の差は縮小されることになるが、現在のところ確定はできない。ただ『山路の露』が仮りに夢浮橋巻の「駄目押し」⁽³³⁾であったとしても、『山路の露』と四作品とが宇治十帖以降の物語を創作しているということに注目すべきであり、その後『雲隠六帖』の前述した五作品に連関していくと考えられる流れを看過すべきではなからう。宇治十帖の成立後、それほど大きな時間の隔たりがない時点で、『心高き』以下四作品に表象されているごとく、夢浮橋巻以降の物語が創作されていたという事実が重要となる。いわば〈統宇治十帖創作熱〉とでもいうべき風潮に関して、作者側からだけではなく、〈統宇治十帖〉の創作を期待する読者側からの熱い視線をも今後考慮に入れていくべきではなからうか。

注(1) 久曾神昇は元久三年（一一二〇）春頃（『物語二百番歌合と研究』未刊国文学

資料第一冊 一九五五・12）とし、樋口芳麻呂は建久三年（一一九二）三

月以後、建久七年（一一九六）十一月以前（『平安・鎌倉時代散逸物語の研

究』ひたく書房 一九八二・二)と推定した後、さらにその差を縮めて、建久六、七年頃(『物語二百番歌合』と『風葉和歌集』(上)―『源氏物語』作中人物の和歌を中心に―)文学 一九八四・五)と考えている。

(2) 樋口注(1)前掲書。

(3) 『無名草子』の本文は新編日本古典文学全集による。

(4) 神野藤昭夫(『散逸した物語的世界と物語史』若草書房 一九九八・二)は、『無名草子』に記された物語は(1)現在から見て古いと感じられるもの(2)「今様」の物語、すなわち近代の物語(3)現代あるいは最近作の物語というように三つに区分し、各々(1)十一世紀に属する物語(2)十二世紀の前半から中期にかけての物語(3)十二世紀後半の物語に対応しているという。

(5) 三角洋一『物語の変貌』(若草書房 一九九六・二)。

(6) 生没年は未詳だが、治暦元年(一〇六五)頃出生し、長承三年(一一三三)頃死去したと推定されている(『日本古典文学大事典』明治書院 一九九八・六。近藤みゆき執筆)。

(7) 『後百番歌合』の本文は岩波文庫『王朝物語秀歌選』による。

(8) 石川徹(『平安時代物語文学論』笠間書院 一九七九・四)は『心高き』の成立を白河・堀河天皇頃、すなわち一〇七〇年過ぎから一一〇〇年初め頃までと推定する。三角(注(5)前掲書)は十二世紀初め頃以前の可能性があると考えており、樋口(注(1)前掲書)は堀河天皇頃の可能性があるとする。神野藤(注(4)前掲書)は十一世紀末までに成立したと考えている。

(9) 『源氏物語事典』(大和書房 二〇〇二・五。足立蘭子執筆)。最近、『二河白道図』という仏教説話画と関連させて、横溝博(『山路の露』のアレゴリー―『二河白道図』からの発想―)(『中世王朝物語の新研究』新典社 二〇〇七・10)は、『源氏物語』で語られている薫が変わらないのに対し

て、浮舟は俗世から脱出して、小野の地で仏道修行を深化させていると二人の対照的な姿を指摘している。

(10) 日本古典偽書叢刊第二巻『山路の露』解題(現代思想社 二〇〇四・8。土方洋一解説)。

(11) 『山路の露』『雲隠六帖』の作者はともに未詳だが、『雲隠六帖』の成立は室町時代かと推定している(注(10)前掲書『雲隠六帖』解題。今西祐一郎解説)。

(12) 「内大臣」か「右大臣」かという呼称に関しては、樋口(注(1)前掲書)が触れている。

(13) 『風葉集』の本文は岩波文庫『王朝物語秀歌選』による。

(14) 小木喬『散逸物語の研究』平安・鎌倉時代編(笠間書院 一九七三・2)。

(15) 注(3)前掲書頭注。

(16) 松尾聰『平安時代物語の研究』(東宝書房 一九五五・6)。

(17) 松尾(注(16)前掲書)は、「侍りける」の下に「頃」が脱したものと考えている。

(18) 松尾(注(16)前掲書)は、中納言の君の籠った理由を関白の正妻関白女に対する遠慮があったのではないかと推測している。あるいは関白女から中納言の君は迫害を受けて「山里」に一時的に身を隠していたか、それとも出産のためかとも考えられる。『後百番歌合』(七)番・三四二)によれば、いつの時点かは明確にしがたいが、関白女は出家する。

(19) 樋口芳麻呂『源氏物語』と散逸物語―「左も右も袖をぬらす」物語を中心に―(寺本直彦編『源氏物語とその受容』右文書院 一九八四・9)。

(20) 樋口芳麻呂『物語後百番歌合』配列考―六十四番から七十三番までの番いを中心に―(愛知教育大学研究報告(人文科学編)第三十三号 一九八四・1)。

(21) 『源氏物語』の本文は新編日本古典文学全集による。

(22) 引用文◎の直前に浮舟が手習いしていた和歌は、「亡きものと身をも人をも思ひつつ棄てし世をぞさらに棄てつる」「限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな」の二首である。

(23) 『風葉集』(所屬卷不明歌)に「関白に行方知られ侍らざりけるを、見あらはしてとかく恨み侍りければ 朝倉の皇太后宮の大納言」と詞書だけが記されており、小木(注14)前掲書は『後百番歌合』(六三番・三二六)と同一の和歌があったと推測している。

(24) 小木(注14)前掲書は内大臣と大将は同一人物であると考えている。

(25) 松尾(注16)前掲書。さらに、新中納言は内大臣よりも大将との関係の方が深かったと推測している。

(26) 安藤太郎は『平安時代和歌集歌人の研究』(桜楓社 一九八二・4)において、「薫像の投影された」資通を指摘している。さらには、天喜三年(一〇五五)の『六条齋院物語歌合』に提出された多くの作品は薫に類似した男たちが登場して、不如意な恋を繰り広げる内容であると神野藤(注4)前掲書が指摘している。

(27) 四例中の三番目の例は、「このあらましごととも、思ひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫大将の宇治にかくし据ゑたまふべきもなき世なり」(新編日本古典文学全集)とあり、傍線部のように浮舟の名が直接挙げられているわけではないが、内容から直ちに浮舟のことが想起される語られ方である。

(28) 大倉『平安時代日記文学の特質と表現』第五章第三節(新典社 二〇〇三・4)。

(29) 大倉「未法」への挑戦―『更級日記』と『堤中納言物語』の場合―(日本文学 二〇〇〇・7)でいささか触れておいた。

(30) 小木(注14)前掲書は『川霧』における「山里に住みける」(風葉集・春下・一〇七の詞書)女主人公に関して、「葎の姫君」で、高貴な血筋を引きながら頼りにする人々に離れて、山里に淋しく暮っていた佳人である」と推定しているが、なぜ山里にいるのかは不明としかいいようがない。

(31) 本位田重美『源氏物語山路の露』(笠間書院 一九七〇・4)。

(32) 横溝博「山路の露」の成立―『建礼門院右京大夫集』『正治初度百首』との関わりをめぐって―(平安朝文学研究 復刊第十五号 二〇〇七・3)。

(33) 注(9)前掲事典。

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)